

## ◆障害学生の修学支援◆

## 第一回 授業から通学路まで

筑波技術短期大学助教 石田久之

平成一七年二月二四日、「障害学生修学支援セミナー」が日本学生支援機構と筑波技術短期大学の共催で行われ、入試時期にも拘わらず、首都圏の三〇を超える大学からの参加がありました。障害学生に対応した施設・設備、障害学生の入学から卒業までという内容の講演と質疑応答でしたが、これらについての関心の高さと、同時に、現在各大学が抱える個別の問題を解決することの難しさを改めて感じました。

本稿は、障害学生の学習・生活における様々な課題を挙げ、その解決の糸口を考えていこうというのですが、この第一回目では「障害学生の修学支援」についての大きなイメージを持って頂きたいと思います。そもそも障害学生の修学支援とは、一体何なのでしょう。どのような内容を含み、どこまでがその領域なのかという疑問を多くの方々がお持ちになっていると思います。そこで、この話から始めようと思いますが、その前にちょっとだけ自己紹介をさせて下さい。

私は前述の筑波技術短期大学の障害者高等教育センターに所

属しています。この短大は視覚障害者と聴覚障害者だけを受け入れている三年制の短大で、センターは教育方法の開発やコミユニケーション指導など、学科の専門教育に必要な支援・サビスを行う部門です。日々の業務での体験や研究の結果をお役に立てて頂くよい機会だと思い、筆を執った次第です。

## 「気配り」と具体的手立て

さて、学生への修学支援というと、多くの方々には経済的・金銭的な援助を第一に考えるのではないのでしょうか。実際、入学金や授業料、生活費などに負担を感じている学生は少なくないでしょう。また、そのために奨学金の整備も多く行われています。かく言う私も学生時代、旧育英会の奨学金にお世話になった一人です。

しかし、障害学生の修学支援というのは、必ずしもそういうことではありません。「物事突き詰めればお金だ」という考えに立てば、お金を集め、それを障害学生に配分するということが支援事業なのでしょうが、(また、事業を進める際、経費の問題で頭を抱えることも少なくないのですが)これから書きたいのは、そうではなく、障害学生への接し方を含めた「気配り」とその具体的手立てについてです。

つまり、障害があるために、学習などの修学上生じる様々な問題を、心の持ちようと言ってもよいのでしょうか、気配りと

具体的手立ての両面から解決する方法を考えていこうというのが、本稿の目的です。

## キャンパスの内でも外でも

では、修学支援の内容について、もう少し具体的なお話をします。「修学」とある以上、学習の場での支援の必要性は言うまでもありません。講義や実技・実習の場ではどうでしょうか。視覚障害の学生に、図表をどのように提示すればよいのか。聴覚障害の学生に授業中の話をどのように理解してもらうのか。聴覚障害の学生に授業中の話をどのように理解してもらうのか。レポート提出にも問題があります。視覚障害学生が点字で書いたレポートをどの教員も読めるわけではありません。期末試験の際の時間延長や特別な配慮は。また、試験勉強をしに図書館に来た車椅子利用者は、スムーズに入れるのでしょうか。教員が、事務職員が、普段何気なく見ている健常学生の行動一つ一つに、障害学生は大きな不便を感じています。

このような直接的な学習面だけに限りません。授業を受けるためには、年度初めの履修申請が必要で、学期が終われば、勿論、成績も見なければなりません。各種証明書を発行してもらいたいことも健常学生と同じです。視覚障害や上肢障害の学生はどのように申請書類を書けばよいのでしょうか。点字の成績表は出してもらえるのでしょうか。

まだまだあります。サークル・クラブ活動などに積極的なことは障害学生も健常学生も変わりません。聴覚障害学生がいるサークル内での情報伝達はどのように行うのでしょうか。コンパにも参加します。しかし盲導犬同伴可の居酒屋を見つけるのは容易ではありません。更に住居はどうでしょう。設備が不十分な場合もあります。アパートにエレベーターがない場合、車椅子利用の学生は一階の部屋に決まってしまう。最後にもう一つ挙げましょう。通学の問題です。修学支援の範囲は、キャンパス内というのが、「なんとなく」暗黙に了解されていることなのですが、通学路の安全確保については、積極的に取り組んでいる大学もあるようです。思いっただけでも、「障害学生の修学支援」には以上のような内容が含まれます。更に、入試や就職活動の支援にも特別な配慮が必要です。

## みんながそれぞれの立場で

このように見てくると、障害学生の修学支援を誰がするかということについては、今更、書くこともないと思います。修学支援の学習面だけを強調すると、主に教員の仕事となってしましますが、実際には、事務職員も、周りの同僚・学生も、地域の皆さんも主要な担い手、支援者です。このような多様な皆さんがそれぞれの立場で、少しずつできることをしていくという考え方がとても重要だと思います。